

古典の日フォーラム2015

日時：2015年11月1日(日)午後1時～4時30分

場所：国立京都国際会館メインホール(京都市左京区岩倉)

内容：総合司会 井上あさひさん(NHK京都放送局アナウンサー)

◆狂言「神鳴」

能楽師大蔵流狂言方 茂山逸平 茂山七五三



【解説】東国へ帰るやぶ医者の前に雷鳴が落ちました。雲間を踏み外し、腰を打った神鳴は、医者と聞いて治療を頼みます。やぶ医者にはしかたなく針治療を施したところ、神鳴はすっかり治り、天に帰ろうとします。やぶ医者は治療代を請求しましたが、持ち合わせがない神鳴は、治療代のかわりに、これから800年間、雨風を操って干ばつや水害から守ってあげてくれることを約束して天に帰って行ったのでした。

◆あいさつ

古典の日推進委員会会長 村田純一

京都府知事 山田啓二(古典の日推進委員会副会長)

京都市長 門川大作(古典の日推進委員会副会長)

宇治市長 山本正(古典の日推進委員会副会長)

◆第7回古典の日朗読コンテスト大賞受賞者による作品朗読

【中学・高校生部門】『伊勢物語』23段「筒井筒」坂戸咲野さん (当時 京都府立嵯峨野高等学校)

【一般部門】『古今和歌集』「仮名序」末尾 岡田八千代さん

◆連続講演「古典と私」

1. 冷酒を古典は後で効く 山田五郎(評論家)

「古典とは大人になって初めて真の良さがわかるものであり、人を成長させてくれるもの、生きていく上での考え方や教養を成長させてくれるものではないかと思います。」と、自身の体験を踏まえながら、改めて「古典」の奥深さについて語られました。



2. 海外で学ぶ古典の心 彬子女王殿下

『源氏物語』の原文を6年間かけて読破され、「どんなに時間がかかっても原文で読んで、自分の現代語訳を見つけることをお勧めしたい。原文で読むことで、当時の人たちの心情をよりよく理解できるように感じ、「古典」に立ち返ってみることが、日本の心を学ぶことにも繋がっていくのではないかと思います。」と、原典に立ち返ることの大切さを強調されました。



◆琳派400年記念「日本の美」宣言

藤原紀香(女優、京都国立博物館文化大使)

『日本の美宣言』は、琳派400年を記念し、改めて日本美術の美と美意識を、次世代へ伝えていくため、琳派400年記念祭委員会が起草したものです。藤原さんは冒頭で、「琳派400年記念祭をきっかけに、今一度、琳派に世界中の注目が集まり、少しでも多くの皆様に、琳派について、今に生きる「日本の美意識」について見つめ直していただければ」と語られ、これからも支援を続けることを宣言しました。



◆パネルディスカッション「琳派とジャポニスム」

パネリスト 彬子女王殿下

高階秀爾(大原美術館館長)

山田五郎

コーディネーター 河野元昭(京都美術工芸大学学長)



19世紀におこった「ジャポニスム」という日本美術ブームの中で、「琳派」が、海外にどのような影響を与え、彼らは琳派のどこに魅かれたのかなど、コーディネーターに京都美術工芸大学学長の河野元昭さん、パネリストに大原美術館館長の高階秀爾さん、先ほどの講演に引き続き、彬子女王殿下、山田五郎さんを迎え、お話しいただきました。

高階さんはフランスを代表する日本美術品コレクターのルイ・ゴンズと尾形光琳の関係を中心に、ジャポニスムの源泉が浮世絵だけでなく琳派にもあること、彬子女王殿下はイギリス人医者であるウィリアム・アンダーソンの『日本美術全書』における琳派の評価を、『標本』でなく『美術』として捉えた点が重要であること、山田さんはクリムトの肖像画に見られる「金の琳派風の模様」など工芸的な表現などについて発表しました。これに基づいて、美術と工芸の関係を話し合い、「琳派は工芸や文学とも結びつき、単なる飾りではない内面性や精神性があり、そういうところは日本美術の大きな特質とも言え、琳派の世界ではそれが大変よく表現されている。」と指摘しました。

その後、「私の好きな琳派 この一作」というテーマで、高階さんは本阿弥光悦・俵屋宗達の「鶴下絵三十六歌仙和歌巻」を、女王殿下は鈴木其一の「青桐・紅葉図」を、山田さんは尾形光琳の「燕子花図屏風」を挙げながら、選んだ理由をお話し下さいました。